●巻頭言

平和をめざす仏教者として

丘山願海（おかやま　がんかい）

この数ヶ月ほど、国家の安全保障とか集団的自衛権について盛んに議論が続いているが、そんな中で、私たち人間がどれほどに愚かな存在なのか、仏教者として悲しいほどに思い知らされる。

仏教では、次のように言う。私たちには「私」「我」という想いがあるけれど、「諸法無我」というように、その「我」とは実は私たちが勝手に妄想した実体なきイメージのようなもの。それなのに、それに執着する、つまり「我執」である。この我執こそが、人生の苦しみ、世界の争いや悲惨さの根源なのだ。「我執」とは、「自己中心性」であり、「自己閉鎖性」である。それに気づかぬ深い愚かさ、無明。

「国家」や「民族」も同じようなもので、「国家」など、人が作り出した仮のものにすぎないし、「民族」でさえ「人類」から考えれば勝手な枠組みでしかない。そういう集団がそれぞれに自国や自民族の利益のみを考え、排他的に敵対意識を妄想する。そして、自分たちと利益を共有する集団同士では徒党を組む。

しかし、釈尊は「一切の命あるものは、安穏であれ」と願われたではないか。大乗の菩薩たちも「一切衆生が病む限り、私も病む」との思いで利他行に励む。法蔵菩薩がその典型である。

阿弥陀如来の智に導かれ、権威や権力に結びつくことなく、国家や民族という仮想に囚われず、多様で具体的な協働によって相互の信頼を醸成し、地球上の一人ひとりの命が大切にされる社会を実現していくことに貢献していく、これが私たち仏教者の使命であろう。（浄土真宗本願寺派総合研究所長）